

大阪の胃袋

湯澤規子 Yuzawa Noriko
画＝三宅増人

第1回

「飴ちゃんおばちゃん」考——コロナ禍中のあそびと余白



咳とのど飴

2020年1月頃、東京の都心から郊外の自宅へ帰る電車内での出来事。座った席の前に立つ女性が咳き込んでいたので、私はバッグの中に手を入れ、のど飴を取ろうとした。もちろん彼女に手渡すためである。しかし、一瞬躊躇した後、私はバッグに入れた手を引っ込めた。見知らぬ人から差し出された飴を彼女は不審に思うかもしれない。いや、この飴は咳をするなどというメッセージなのかと不穏な空気が流れるかもしれない。そんなことを考えているうちに、飴を手渡そうとする気持ちがいぼんでしまった。

それから状況は急変した。コロナウイルス感染拡大と防止対策の波に世間が飲み込まれてからというもの、電車で咳き込む人をついぞ見たことがない。また、偶然居合わせた他人に食べものを手渡すこと自体も難しくなり、それは私たちが遠い昔に忘れてしまった行為のようにさえ感じられる状況になった。

飴ちゃんあげよか

「飴」と呼ばれるその一粒を大阪の人は「飴ちゃん」と呼び、他人に配ることがよくある、というのは都市伝説ではない。実際、大阪生まれの私は子どもの頃に電車の中でたまたま隣に座ったおばちゃんに飴ちゃんをもらったことがあるし、「大阪のおばちゃん」風情が板についている母や祖母はいつも「飴ちゃん袋」を携行していて、その中には黄金糖や黒飴がみっちり入っている。乗り物に乗った時の会話は「飴ちゃんあげよか」から始

まるのが常だった。ちなみに菓子製造業の視点から見ると、大阪はUHA味覚糖、ノーベル製菓、扇雀飴本舗、パイ、豊下製菓など多くの有名飴專業メーカーの集積地でもある。だからという訳ではないのかもしれないが、とにかく大阪のおばちゃんはいつも飴ちゃんを持ち歩いている。ところで、「飴ちゃん」とはいったい何なのだろう。あらためて考えてみると、それは会話や場の緊張感を緩める「あそび」と「余白」の妙だと思えるのである。予定調和の会話の流れにボンと小石を投げ入れたような、心地良い波紋と言ったらよいだろうか。それで場の緊張感はぐらりと揺らぎ、あらぬ方向から心に風が入ってくる。「あげよか」と差し出されるのが飴一粒であるということも重要なポイントだ。断るほど大きではなく、手渡しても邪魔にはならず、何と言っても見た目がかわい。そしてダメ押しとして、飴に「ちゃん」がついている愛嬌。

こうした飴ちゃんコミュニケーションが織りなす世界は、親しい間柄だけでなく、たまたまその場に居合わせた一期一会の人びとをも巻き込んで、偶然性に満ちた不確実な世の中を楽しんでいるようにさえある。などと書く、「そんな、考えたこともないワ。大げさやなあ」と笑われそうだが、電車の中を見回すと、無表情で他人に無関心を装っている東京と、飴ちゃんおばちゃんが生息し、例えば、松葉づえの女性にずいっと近づいてきたおばちゃんが「怪我したん？ 保険って入ってたほうがいいなと思うことあるわな」と、急に話したりするのは大阪とは、その雰囲気はだいぶ違うのは確かだ。出産後に大阪から東京へ引っ越し

てきた母は、大阪では見知らぬ人との会話のきっかけだった「赤ちゃん」を連れていても、話しかけてくる人がまったくいない東京の電車が、最初はとても不気味で怖かったと話していたことを思い出す。それは、東京には「飴ちゃんおばちゃん」が生息していないこと、他人とのソーシャル・ディスタンスがもともと遠いことと無関係ではないといっても、あなたが間違いではないだろう。

コロナ禍中のあそびと余白

彼女たち、つまり「飴ちゃんおばちゃん」はこれからどうなっていくのだろうか？

コロナ禍中で人と人との物理的距離をとることが重視される中、大阪ですら、おそらく「飴ちゃんあげよか」と気軽に声をかけづらい状況が続いているのではないかと想像する。飴ちゃんおばちゃんが絶滅の危機に瀕しているとすれば、それは大阪から、ひいては私たちの生きる世界から「あそび」と「余白」が消えていくことを意味する。

しかし、逆説的ながら、私はコロナ禍中で、私たちが生きるうえで、普段は役に立たないと見なされがちな「あそび」と「余白」がじつはとても大切で、欠かせないものであることに気づいてしまった。4月から急遽、様々なツールを駆使してオンライン講義を実施し、なんとか例年通りの情報を過不足なく学生に伝えることができたが、何か物足りない。それは何だろう、と考えた末に得た答えが「あそび」と「余白」だったのである。

講義前の学生たちのざわめき、食べかけのパンのにおい、窓の外に揺れる若葉、資料を手渡しながら交わす「朝ごはん食べてきた？」という会話、

携帯やめなさいよという目配せ、私の言い間違いや物忘れ、その瞬間に生まれる笑いの渦、ウトウトしていた学生がある言葉に眼を見開いたときの感動。数え始めるときりがないが、こうした、講義の内容そのものには直接関係がないように見えるすべてが、学生と私が学び合うその瞬間を絶えず間なく紡ぎ続けてきたのだということ、今さらながら思い知ることになった。

コロナ禍中でもその後も、私たちは「あそび」と「余白」を手放してはいけないのである。私はあの時、咳き込む彼女にのど飴を、いや「飴ちゃん」を手渡してみるべきだったのだ。だから、今何が必要かと問われれば、大阪発の飴ちゃんコミュニケーションを世界中に広めること、と答えようと思う。

子ども食堂が開けないので、今日は「飴ちゃんあげよか」という思いを込めて、近所の子どもたちに食材やお菓子を配るフードパントリーの活動で汗を流した。緊張が続く日常を生きる彼らのマスク越しの笑顔に、「飴ちゃんあげよか」という一言は「お腹空いてへん？」という声かけにも似て、雑多なこの世に今日も誰かと共に在ることを感じさせる力があると教えられた、晩夏の午後であった。

ゆざわ・のりこ 法政大学人間環境学部教授。筑波大学歴史・人類学研究科満期退学。博士(文学)。専攻は歴史地理学、農村社会学、地域経済学。1974年、大阪府八尾市生まれ。3歳で東京、千葉へ転居したが、祖父母や両親の影響を色濃く受けた食環境により「大阪の胃袋」育ちを自負する。「胃袋の近代——食と人びとの日常史」(名古屋大学出版会)や「7袋のポテトチップス——食べるを語る。胃袋の戦後史」(晶文社)など、資料や証言をもとに近現代史を胃袋から捉え直した快著が話題に。